映画「おくりびと」の大ヒットに表れるように、現代は人の死に諸方面から関心が寄せられている。死体、軟組織、死の解釈、医学、人類学、宗教学、民俗学、文学、歴史学、美術学などの分野から多角的な視点が取られている。

したがって、死体の状態やその意味についての哲学的な考え方、死体の解釈学が生まれている。これはアラン・コルバンらの歴史社会学派が行った、人間の身体や行為の歴史的展開に注目する研究に発展されたものである。これには、以前にも、日本古典文学における仏教との関連性が注目されている。

二、死体の「ニオイ」（以後、人間の臭覚としてとらえられるもの）

死体の「ニオイ」（以後、人間の臭覚としてとらえられるもの）を判断する考え方（「壊壊」）は、西欧中世の聖人伝についても考えられ、これらの研究は従来の医学、人類学の手に委ねられ、その「壊壊」そのものの意味については哲学的なものがある。

人説著にとても類似することから、東西中世において「神聖な人説著」にも酷似することができる。ただし、西欧中世の聖人伝については必ずしも一致が図れていない。ヤコブス・デ・ヴァラジネの「黄金伝説」に至っては、西説著の比較の可能性があることの指摘にとどめる。
「九相詩」やそれを絵画化した「九相図」（九相詩絵巻）とも）が死体が腐乱してゆくさまを如実に描くものだと思われる。もっ
とや、高価な香木がスティックに変形し、腐敗している場合に、死体の「ニオイ」は芳香である
と、あるいは、死体という意味に直結するといえる。ニオイは当人の死を「往生」としてとらえるか、ある
であろう死体という特別な「死」を人々の前に表わすものという違いは、「凡霊の衆生の単なる死」を示す証拠として対比され、芳香はしばらく、前
述した往生の寄瑞のいくつかの要素と組み合わされて、腐
る死体という死体だと思われ、単に往生の瞬間だけではなく、時間がたつ
ても腐敗せず生前の姿をとめるという記述をともなうこ
とが多い。これは、往生者が「腐る人間」という生理的宿
命を超越し、特別な人、西欧中世でいえば「聖人」のごと
き存在となったことを意味している。吉村は、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、道教などの宗教における儀礼で「聖なる句い」として機能していたと
述べている。また、往生人の異香が往生決定のあらしであるこ
と、千々和の論に基づきつつ「往生要集」を引用して指
摘している。吉村論文から本論に関連深い箇所を次に引用
しておこう。往生伝においては、「基本的に、往生人の死体は枠
はならない。死体不爛壊、容顔不変」などといった
ことばで、死体が生前のままであることを保っていることが
節で触れるように六道のうちの人道の不浄たることを説く
異香だけは嗅覚というすこぶる私的な身体性にかかわる要
素である。個人の官能に関わる「ニオイ」を生のするし
として記述することの意味は何だったのだろうか。
なお、身体が芳香を放つのは往生者だけの特徴ではなく、
吉村晶子によれば、「源氏物語」の薫が生まれついての体
臭がありまでも芳香を放つものであったという例もあり、身
体の芳香がその人を特別な人物として聖別する場合がある、
平安貴族が薫き物などの嗅覚文化に精通し拘泥していたこ
考えすれば「ニオイ」はたしかにその人にプラスの評価
を与えたものだったと考えられる。
示され、往生が決定されるのである。朽ちてはならない
死体は、むろん腐臭を漂わすわけにもいかない。

では、時代を追いつく“往生伝類”に見える“腐らない
死体”（芳香を発する）の特徴的な例をあげみたい。

吉村論文と重複する例もあるが、やや趣旨が異なること
を断っておく。

まず、“往生伝類”の嚆矢というべき、慶滋保胤の“日
本極楽往生記”（十世紀）には、次のような例が見いただ
る（以下、断らない限り引用は“日本思想大系
往生伝
法華論記”による。便宜上通し数字を付けた）。

二種類の傍線で示したように、平安時代に往生者として
位置づけられた聖徳太子の死体は、芳香だけではなく生前
と変わらない姿、つまり“腐らない死体”であったことが
記される。これは聖徳太子が“聖化”した証といる。

ただ、日本のように四季による気温の変動が激しい土地
においては、厳寒期などでは死体の腐敗が当たり前の現象
だとはいえないだろう。夏季や腐敗しやすい環境にあって

1. 太子ならびに妃、その容生きたるがごとく、その
身太だ香し。

聖徳太子

2. 暑月に遇ひて数日を歴たるといへども、身は爛壊
せぬ、存生の時のごとし。

高階真人良臣

4. 参議藤原の為隆、時に夜漏暁に及べ、奇香室に薫
ばし。僧徒皆以ておもへらく、往生の人なりと。後数
日の間、容顏変らず、肌膚猶し軟かなり。

“後注解往生伝”下巻(二)

3. 高階敦遠の室、十数日を送りて、葬葬の時に至り
ぬ、暑月に当るといへども、香しき気四に散ず。

(拾遺往生伝)下巻(二十五)
定印を—who is responsible for setting a seal—のことなし。

（肥前国小松寺の上人・拾遺往生伝・下巻十一）

10. 室を開けてこれを見るに、顔仏前に向ひ、手定印を結ぶ。威儀乱れず、端座して入滅す。（略）早に殲せ

斎せ。（勝尾寺の証如「後拾遺往生伝」上巻十七）

11. 気絕ゆるの後、奇香室に薰しく、和顔存せるがご

とし、中略。葬斎の間、故て臭気無し。

（上人経源（暹）後拾遺往生伝・中巻二）

12. 決死の剣、気絶の後、念仏して唇動き、身体脅軟

かなり。深窓の中香気常に在り、数日の間、臭期全く

無し。（藤原の姫子「後拾遺往生伝」卷二十）

この他にも多数例はあるが、僧侶の死についての記事が

比較的多く、12は女性の死の場合でも同じ現象が発生した

とされたことがわかる。7の増賀の死の模様は『元亨抄

書』巻十にもある。「自分が没した後、三年を墓を開く

と命じて死んだ。後三年たって開いてみると、全身が壊れ

ずただ衣装だけが朽ちていた」という内容であり、長期間

は死の直後から数日間の出来事であるが、8、9、10のよ

後には死体の安置所（棺）など）を開いてみるともと

のままだった、という例も少なくはない。增賀や仁賀など

は自らの死体に変化がないであろうことを予告されてい

る。これらは永遠の「聖化」を強調するためと思われる。

これは往生とはいいえないが、よく知られた弘法大師空海

の弟子、真如筆の空海僧都伝異と共通している。史実

としては火葬されたらしいが、現在でも高野山奥の院に空

海の変わらぬ姿が「ある」といわれており、毎日僧侶によ

って食事が運ばれるたり、ひそりと、着替えなどを行う儀

礼も続いており。十世紀成立の「金剛峯寺建立修行縁起」

では、

七々御忌に及び、諸弟子等臨み見るに、顔色衰えず馨

髮更に長し。（弘法大師伝全集第一巻、書き下し）

とあり、また十一世紀初頭の「政事要略」（巻二十一）に

も記される。

大師入滅の後、その身乱離せず、猶高野にあり。希代

のことなり。（国史大系本、書き下し）

空海の場合は身体が腐敗しない、というよりさらに積極
死体の腐敗や破損がないことを以て往生確定を宣言する例もあり、これらを併せ読むと、いかに「非腐敗」ということが「死」に際して大切であったかがわかる。典型的な例を引用しておこう。

13. 予信に告げて云はく、我れ年未往生を願へり。死後三箇日、斎葬をすべからず、もし身体罹傷せざれば、必ず往生の瑞となるべしと云ふ。（中略）遂にもって仏に、その体平生の如くして、敢て変ざる気なし。髷髪五、六寸、生ひてへんへりたり。
四、死後三日という期間

「源氏物語」には、六条御息所の試し生霊に悩まされた
蘇生の可能性があるゆえ「死」と断定出来なかったためにある。
死者は北枕西向きに治す「枕がえし」をしなかった
二度の夜の人少な邸内で急に胸の差し込みに襲われた蘇生は、高僧の祈
礎を合わせ息絶えてしまう。蘇生の遺体は、「死」の
判定が出来ないまま二、三日その状態で安置されるのである。

医学史の諸書には、根拠は明示されていないものの、平
安時代までの「死」の判定基準を「息の有無」に置いていると考えられる。
「息の有無」ないしは診察により確認するしかなかったと思われる。

医師の「死」が確実と見えたのは、傍線部のように死相
が誰の目にもあったり見えるため、傍線部のように死相
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生

うよう変わりましたかどうもあのね、限ると思いつつ
死後の三日目しては

蘇生の可能性があるゆえ「死」と断定出来なかったためにある。

医師の「死」が確実と見えたのは、傍線部のように死相
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生

四、死後三日という期間

「源氏物語」には、六条御息所の試し生霊に悩まされた
蘇生の可能性があるゆえ「死」と断定出来なかったためにある。
死者は北枕西向きに治す「枕がえし」をしなかった
二度の夜の人少な邸内で急に胸の差し込みに襲われた蘇生は、高僧の祈
礎を合わせ息絶えてしまう。蘇生の遺体は、「死」の
判定が出来ないまま二、三日その状態で安置されるのである。

医学史の諸書には、根拠は明示されていないものの、平
安時代までの「死」の判定基準を「息の有無」に置いていると考えられる。
「息の有無」ないしは診察により確認するしかなかったと思われる。

医師の「死」が確実と見えたのは、傍線部のように死相
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生
の死相は、皮膚の変色や腐臭であると推測される。蘇生

「死」を確認出来たということになる。

一方、死後三日を経たたてて家族は蘇生の死を

うよう変わりましたかどうもあのね、限ると思いつつ
死後の三日目しては
放置の理由は彼女が生前に取り殺されたと解釈されたからである。
そこで注目したのが、地上の「死」（よい「死」ならば往生となる）の判定期間が「三日」とされている箇所である。先述の千々和論文では、源信の撰である「横川首楞厳院二十五三昧起請」に「死」に関わる三日間という具体的な日数が記されていることを取りあげている。当該書第十六条は念仏結縁の墓地の用意と葬礼方を定めており、「一結の死人、三日を過ぎず、すなわち日数を論ぜず、
もし念仏結縁が往生出来なかったら、それは結社自体の存在意義を危うくすることになる。そのため、腐敗の様相が顕著になり始める時間的な境界線として三日間という数字が生まれたと思われる。この三日間（七十二時間）は平安時代の人々が経験的に知ったのだとも想像されるが、現代の法医学によっても裏付けられる数字である。地方によって気温や湿度の差はあるよう、人間の死体が放置された場所、腐敗が視覚的・嗅覚的・誰の目にても明らかに認知される基準として七十二時間が必要である。

その遺体処理の限度として三日という具体的な日数が示されていることは注目してよい。前文の論文の例のように述べている（傍線は筆者）。

当然ここには表現されている。同志たちの遺体が腐り、臭気を発し、つまり人びとに彼の死が往生ではなかったのではないかという疑いをいやかせる前に、遺体はどうしても処理されねばならなかったのである。

三日という数字は、このように経験に裏付けられたものの

26
五、腐る死体

腐敗した死体が発する腐臭については、「今昔物語集」巻十四の大軍定基の出家譚に如実にうかがうことが出来る。愛する女性の死を受け入れられなかった男が、腐臭に出遭うことで無常を痛感するという著名な話である。

その後、定基悲しみ心に堪えず、久く葬送する事無きし、抱て臥せり。臭き事にと懲しきるに、口を吸けるに、女の口より苦き香き香の出来たりける、踵む心出来て。泣々葬しけてり。

（新大系本）

あさましい腐臭によって女の絶対的な「死」が確定してしまいという点で、本話の背後には腐らない死体と腐る死体の差異という文化があると思われる。これは実際的な腐臭の現象を反映したもので、天皇の窮状に聞かれる事なく、腐れ果てた死体の変異を告げるという意を含んでいる。
見える、敢えて人道の不浄さを見せることで僧侶の淫欲を戒める箇所は、香などの人工的な芳香と自然の腐敗とが対立的に描かれている興味深い。

さま下のほかの句をひいて、いさがその身をかざじて待れば、なにとなく心にきたさまに侍にこそある心を、まことにくさく耐へ（念）がたきさまでて、

人工的な芳香は、往生における奇瑞なる異香はまったたく異なるものであると考えられていたことがよくわかる。類似の例として「発心集」巻第四「玄寛、念を仏相の室に係くる事」と引用しておこう。

以上、粗々とある程度の死体にまつわる二つのニオイについて、主に古代後期から中世前期にかけての資料を俯瞰し、まとめた。ニオイと奇瑞については、日本だけでなく諸地域における伝統的宗教世界において共通の説話が残ってきている。「はじめに」で触れたように、西欧中世の聖人説話の集大成といえる『コプス・デ・ヴォラギネの黄金伝説』には、死体が長年埋まなくて生前のままのようである。

だが、なぜ西欧中世の聖人説話と日本の高僧・聖人説話が類似するのか、また、日本に諸方面で影響を及ぼした中国や朝鮮半島ではそのような説話があるのかなど、今後考